

夢は世界を翔けめぐる

中島鎮夫(田原 芳)未完の年譜

1990.6.10

中島鎮夫(田原 芳)を偲ぶ会

この年譜は中島鎮夫君を偲ぶ会むけに作成しましたが、同時に同志社大学学生運動および関西共産主義者同盟の記録としても作成しました。異論のある方も多々あると思いますが、中島君に関連した限りでの記録であり、関西ブントの正史ではありませんので御容赦願います。尚、明らかな事実誤認等については皆さんから御指摘いただければ幸いと存じます。

* * * *

同志社大学入学まで(1938~59)	1
(補) 中島鎮夫入学までの同志社学生運動の歴史(抄)(1946~1958)	2~4
小さな旗上げ(1959~63)	5~12
再建から激闘への序曲(1964~67)	12~18
その意氣、天をも衝く(1968~69)	19~24
分裂…失意の日々(1970~79)	25~27

* * * *

夢は世界を羽けめぐる

中島鎮夫(田原芳)未完の年譜



★同志社大学入学まで(1938~59)★

1938年(0才) 11月3日、満州国奉天市に父光夫、母常子の長男(姉一人、弟二人、妹一人)として誕生。

1946年(7才) 家族で博多港にひきあげて、その後長崎県川棚町(平戸市の近郊)に居住。

1951年(12才) 川棚町立石木小学校卒業。

1954年(15才) 川棚町立川棚中学校卒業。

1957年(18才) 長崎県立川棚高校卒業。

高校時代より美術部に所属、油絵に熱中し、美大を志望する。

1959年(20才) 二浪の後、美大入学をはたすが、色弱のため断念。

同志社大学への進学を決意し、九州・長崎の地を離れ、京都へ。

折しも60年安保闘争の序盤戦が開始されており、風雲のドラマが幕を開ける。

1946年 4月 ● 学内に共産党細胞、共産青年同盟が組織化。学生新聞復刊、社会科学研究会・唯物論研究会結成。

1948年 9月18日 ● 全日本学生自治会総連合結成。
*同志社の加入は1952年。

メーデーへの参加者数は、1947年 / 5名、48年 / 30名、49年 / 40名、50年 / 180名、51年 / 800名

1949年 4月 ● 湯浅八郎に幻想をもち総長に迎えられ、民主的改革へ。

6月 ● 中央委員選挙で共産党細胞公認候補三名当選。

8月22日 (15日の説も?) ● 湯浅総長「学内政治活動禁止令」。

10月 ● 学長選挙への学生参加要求運動。公選要求。

学長制が導入されることになり、学生は田畠忍教授推薦、学長実現のため運動する。

1950年 8月 ● 学内刷新・総長追放運動の一応の勝利。

1951年 2月14日 ● 学内の平和運動の全学的共同組織として「平和に生きる会」結成。ついで6月17日「キリスト者平和の会」結成、全学に拡大。

4月 ● 田畠忍学長に就任、第一声は「自由・無処罰主義こそ私学設立の基礎」と発す。自治会選挙、平和統一グループ進出。

6月23~24日 ● 同志社平和祭。

7月9日 ● 体育会「平和に生きる会解散」を要求して学生大会開かれるも圧倒的多数の反対で否決。

10月24日 ● 法学部自治会、単独講和条約反対のスト宣言。経・文の有志大会へ波及。

11月12日 ● 京都大で「天皇事件」。同学会解散。

11月 ● 民主青年団同志社班組織化。

1952年 2月 ● 「反植民地デー」集会とデモ。

<同志社大学文学部教授山本明氏の回想>

当時、「赤旗」は依然発行停止という状態の中で、日共「五一年綱領」が決定され、その方針の下で計画された。この日、デモに参加したのは数十人、正門を出発したデモ隊は「コミュニケーションのマルセーズ」を歌いながら出町へ向うが、交差点で待ち構える機動隊にけちらされちりぢりにされる。

<……「いつの日か勝利する」というイメージは誰の頭にも明確には存在していないかった。むしろ「われわれは抵抗しなければならない」とか「旗をかけげることがわれわれ学生の任務だ」と考えていた。そういう闘争は悲愴感で支えられていた。少数派であることに、ほこりをもっていたのである。

……>

この時期、左翼がかろうじて勢いをもっていたのは学内だけであった。

ある独立プロが製作した炭労を扱った映画の中で歌われる『民族独立行動隊』や『ワルシャワ労働歌』に思わず知らず場内の観客一同が合唱してしまうという暗い…時期のエピソードも語られている。(山本明『戦後風俗史』より)

5月14日 ● 全学生有志大会1100名。

「破防法反対共同闘争委員会」結成。他大学、労働組合への働きかけ。法・文・経スト、全学スト。

5月28日 ● 全学学生大会、全学連加盟を決議。

7月7日 ● 中央委員会選挙で平和統一グループ勝利。

1953年 5月 ● 内灘軍事基地反対闘争。

水害救援闘争～7月和歌山、9月南山城へ

山村工作隊

学園復興闘争＝「荒神橋事件」。

1954年 田畠学長辞任撤回要求でハンスト。若王子・新島先生墓前。

1954~57年 この時期、日本共産党の軍事方針・「極左」路線と、その後の右翼的迎合路線とのジグザグの中で学生運動への党指導の無方針がつづき、細胞活動は事実上機関誌配布活動のみ。学友会本部は体育会系主導のもとにおかれた。

1955年 日本共産党六全協。

佐藤浩一入学、経済自治委員に。

この時期の活動家が翌年共産党へ入党。

1956年 4~6月 ● 全学連八中委(四月)、九回大会(六月)で「平和と民主主義、よりよき学園生活」のスローガンの下、学生運動の再建へ。

秋 ● 増田誓治(前全学連副委員長／年文)を中心に全学連第九回大会路線の実践が本格化する。

1957年 春 ● 日本共産党同志社大学学生細胞再建さる。

他方、細胞とは別個に反戦学生同盟同志社支部が結成され、多数の左派活動家を結集。その後、細胞と反戦学同は合流し、同志社学生運動のリーダーシップを掌握。

5月17日 ● 原水爆実験反対大集会。同志社から三千名参加。

6月 ● 学友会本部、体育会系主導から反戦学同主導へと奪還。委員長畠中清博(55年経)。

56~57年の同志社学生細胞キャップは佐藤浩一。

砂川・勤評闘争へ参加。

11月1日 ● 原子戦争準備反対国際統一行動。経・文・法のスト、神全員

1958年 当時、同志社大学では六全協後遺症のため学生運動方針皆無におちいった共産党京都府委員会と、他方自力で学生運動の再建にあたった学生細胞および反戦学同との間に対立激化。

5月26日●反戦学同は社会主義学生同盟と名称変更。

6月1日●共産党中央本部での青年学生対策部会議で全学連グループ、本部書記局員を詰問、謝罪さす。いわゆる「六・一事件」。共産党中央はこれを「前代未聞の党破壊」「トロッキストの陰謀」と騒ぎたて、進行中の「綱領論議」「社会主義革命論争」をめぐっての反対派ページに徹底して利用。

同志社学生細胞は全学連グループに同調せず、少数派。その後の革共同およびブント結成への消極的対応の要因となる。

学友会委員長、仲尾宏（56年法）。

秋●警職法反対闘争盛りあがる。この時期の指導部は佐藤浩一、松浦逸郎（56年）、仲尾宏、浅川清。

10月28日全学スト。

<--学生の手記より>

田畠忍教授の「同志社は民主主義と良心の砦である。警職法反対の闘いは同志社よりおこらねばならない」という感動的な演説のあとでカレッジソングと「国際学連のうた」を全員起立してうたい幕をとした。／同志社に学ぶ一人、一人が襄の子たる光栄ある任務をはたした。……「襄の子」は1400名をこえた。先頭が出町に達しても最後はまだ校門の中にいる長いデモ隊をみおくりながら、ぼくは「破防法闘争は再現した。一人一人の叡知によって……」と自分にいいきかせていた。（『同志社の襄』59年版より）

12月10日●共産主義者同盟結成（島成郎書記長）。

同志社の共産党細胞、反戦学同はブントへの結集を見あわす。

京都からはさみだれ式にブントへ参加。

京都大では小川登、今泉正臣等は既に革共同へ加入済、後にブントへ合流（60年分裂後は戦旗派を経て再び革共同へ）。北小路敏は無党派のまま京都府学連委員長に、後にブント加盟、全学連中央へ、革共同へ。

小さな旗上げ 1959~63

1959・20才

同志社大学文学部社会学科入学。

社会科学研究会入会。

入学後、直ちに学生運動に参加。折から60年安保闘争の前哨戦がはじまる。

6月●中島鎮夫、文学部自治会委員に。

一方、共産党同志社大細胞では反戦学同メンバーの同志社細胞への加入が優先され、ブントへの結集は遅々として進まず。

中島鎮夫、日本共産党へ入党申込提出。

5月1日～●手数料徴集強行反対で一週間のハンガーストライキ。支持署名が7000名に達し、徴集阻止。

6月●学友会委員長高野澄（57年）。



京都での60年安保闘争の
集会・デモ
(生協「東と西と」1990.6より)

10月●島成郎、同志社細胞オルグのため来京。別の証言ではこの秋、姫岡玲治、生田浩二、唐牛健太郎等が足繁く京都へブント参加のオルグに来訪。生田との話、そして日共京都府委員会学生対策部での論争・対応が契機となり、中心メンバーがブントへの移行を決意。

11月 ●全学部細胞内の討論を経て全学的に離党を決定、ブント同志社細胞結成を決定。

機関誌『小さな旗上げ』を発行。

○証言 このブント結成へむけてのオルグについて次のような証言が残っている。
<……ぼくは共産党員として同志社大学学友会の委員長になった。なったにはなったが、党員の立場が重苦しくてたまらない。たまらんたまらんで半年ほどしたところに、ブントに代るべし、との誘いがくる。誘いをうけたのは四人で、僕がひとり新参者。A君にいたっては中学校以来の共産党という猛者だ。誘いを仲介した一人は別として、あの二人がどう考えたか、わからない。とにかく僕はブントに移りたいと思った。説明を聞けば聞くほど、これは行動集団だという気がして、そこが気にいった。

A君が早く、ウン、と言ってくれればいいなと願い、そうなったときには本当にうれしかった。>（高野澄「ほのぼの回想記～今出川から広小路」エスエル出版会、1985年3月発行『敗北における勝利～樺美智子の死から唐牛健太郎の死へ』所収。）

別の証言によれば、この時誘いをうけた「四人」とは佐藤、仲尾、高野、浅川の四人であるという。ともあれ、こうして東京におけるブント結成から遅れるここと一年有余、「遅れてきた青年達」はブントに集うことになった。合言葉は「全世界を獲得するために」。

11. 27 ●全学連および東京地評、国会突入・構内集会。

政府・自民党・マスコミ・日共あげて「議会制民主主義をふみにじる暴挙」と全学連を叩く中、共産党内の革命的労働者の分岐・全学連との合流が開始される。

<東京では人の人生観が変っている。

東京に続け。

全ての活動家諸君、戦闘配置につけ。>

（「府連書記局通達」59.12.3 京都府学連発行）

大阪へ出て労対活動を開始していた佐野茂樹（56年京大）、大阪・神戸で労働者同盟員を組織。

1960.11.21

1月16日 ●岸渡米阻止のため同志社より30名上京、羽田空港ロビー籠城闘争。
全電通大阪中電細胞は、57年の「千代田丸事件」以来、党指導への疑問を抱いてきたが、砂川闘争や「平和共存」論争を経て批判を強め、59年11月27日の国会突入闘争に

感銘し、党の姿勢・動向にショックをうけてきた。

60年1月16日の岸渡米に際しても大阪中電職場代表団6名を派遣、直前の共産党等による「動員中止」のどう喝をはねのけて現地へ。デモは学生ばかりで「労働組合の旗はただ一本、大阪中電の青年行動隊旗しかなかった」という。（元日共中電細胞委員長前田裕晴「日本共産党大阪中電細胞離党に至る経過について」1961.7.10より）。前田裕晴は53年文学部入学、社会学科委員長をつとめ、学内活動家組織「木曜会」を組織。早春、中島鎮夫、ブント同盟員となる。

全学連中央指導部の相い次ぐ逮捕・弾圧で手薄となった中央指導のため京都より北小路敏（京都大）を派遣。京都府学連委員長は浅川清（57年経）。

意志表示 せまり声なき こえを背に

ただ掌の中に マッチ擦るのみ

（岸上 大作 『意志表示』）

ただ許されるものなら 最後に 人知れず ほほえみたいものだ。

（樺 美智子 『人知れず微笑まん』）



国会突入

中島鎮夫、学友会書記長に就任。委員長井上弘次（58年）

体育会、応援団により学友会指導部暴行され負傷。

60年安保闘争最高潮、「6・15全学連国会突入闘争」、権美智子さん警官の暴行により虐殺。

○ 証言 ○

テレビ等で活躍中の大阪出身の秋野暢子が最近の番組の中で次のような事を発言。彼女が子供の頃、父親が経営するアパート（大阪の京橋付近）に優しいお兄ちゃん達がいて、よく遊んでもらったとの事。60年安保闘争の真っ最中であったが、ある日そのお兄ちゃんが血だらけになって帰ってきてびっくりしたという。このお兄ちゃん達は後にさる筋から「関西ブント」と教えられたそうだが、後日談があって「このお兄ちゃん達は家賃をふみたおして夜逃げしたそうだ」という。「夜逃げ」云々は定かではないが、種々の事情から見て、当時その付近にアジトを構えていた〇（為念、この〇氏はブント分裂後は関西ブントとは別のグループを旗上げした人である）を中心とした仲間の事ではないかと推察している。

ブント第五回大会で分裂。中央は四分五裂。

同志社細胞は独自に安保に取組み、独自で総括を進めていた関係で、ブント中央のどの分派にも属せず、分裂反対、ブント再建・再統一を志向する立場をつくる。

10月●学友会指導部改選。委員長村松徹朗（58年）、書記長中島鎮夫。

同志社社学同、硬直化した各分派に見切りをつけてブント再建活動へ。花井正（佐藤浩一、55年経）、京都大社学同メンバー（1～2年生）と接触開始。

1961 ● 22歳

関西地方委員会は花井正を中心に大衆運動の発展・堅持の上に再建への活動をはじめる。「われわれの思想の立脚点を明確にしよう」とのサブタイトルでレジメ風論文『綱領への前進』が発表（60年12月1日から61年2月頃まで）された。後の「政治過程論」の原型が作られた。

ブント残存グループを総結集しての京都会議に参加。東京・九州のグループとも交流開始。

全電通大阪中電細胞を基盤に活動していた前田裕晤（53年文）等は、その後、共産党大阪府委員会から「反党活動」を理由に除名される。日共内で「北大阪最大の労働者細胞」と評価された中電細胞は解散。直接のきっかけは、3月13日共産党北地区委員会が車をのりつけて中電へおしかけ、前田裕晤をつれさり「査問」しようとした事件であり、これを目のあたりにした党員達は綱領批判派ではないメンバーまで含めて怒り、解散を決議した。

前田等は、その後電通労研を組織し全国化、新左翼労働運動の全国的拠点として60年

代を闘いぬく。

学友会委員長杉本修一（58年）、書記長田中正治（60年経）。

中島鎮夫、京都府学連副委員長に就任。委員長浅田隆治（京大57年）。

京都府学連、全学連第17回大会へむけ安保闘争の独自の総括「安保闘争の政治理論としての総括」（いわゆる「政治過程論」執筆山本勝也、58年）を提起。

<……政治闘争の……「深さ」は、対権力との関係で、安保闘争に典型化された〔支配階級の意志に対立する被支配階級の全国組織→国家の幻想性に対するより大なる幻想性をもつての闘争→国家の幻想性の暴露→国家権力との直接的、全面的対決〕という現代における政治闘争の発展過程のどの段階まで進展したかということである。……政治闘争の質的発展にとっての決定的に重要なのは戦術であるということを明らかにしてきた。……>（提案者は京都府学連、京都大学全学同学会、同志社大学学友会、大阪市立大学経済学部自治会、奈良女子大学自治会）

中島鎮夫、全学連中央執行委員選出。全学連分裂。

労働者への呼びかけを目指して関西労働者協会設立。

中島鎮夫、これに当初より参画。この後、関西社学同、関西共産主義者同盟を結成。地方から烽火を擧げるの意から労働者協会からパンフ形式の『烽火』を発刊（第1号は1961年10月6日）。発行場所は同志社大学内府学連ボックス。

中島鎮夫、機関誌紙上でも精力的に活動。

中島鎮夫
主要論文
「現代資本主義（その…）」（田原芳、『烽火1号』61年）
(1) 国家と独占 (2) 段階規定の指標

1962 ● 23歳

学生組織、社会主義学生同盟関西地方委員会から『戦士』を発刊（第6号まで刊行）、全国的な学生運動の沈滞の中で希望の星として存在。

学友会委員長藤野興一（60年文）。府学連委員長清田祐一郎（京大59年文）。

憲法公聴会粉碎闘争、各地で展開。

秋●『烽火』は10号をもって『共産主義』と改題（15号63.10まで）。冒頭に「関西ブントへ結集せよ」の見出しがおどっている。なお大衆運動方針むけとして新聞『烽火』も発行されはじめた。

<……我々の新たな組織は、以上のようなブントの伝統の上に立った革命的労働者と、社学同の革命的インテリゲンチュアを中心とした過渡的地方組織であり、それは関西共産主義者同盟と呼ばれるであろう……>

<……すい星の如く現われ消えた「同盟」。それはそもそも何ものであつたか。／安保闘争ののちに訪れた分派闘争と混迷の中からすでに立ちあがったもの、そして大管法から憲法改悪に至る反動化を前に新しい闘争の戦列を固めなければならぬもの、またあの「同盟」が既成左翼のくびきを断ちきり更に伸びあがって手を届けさせようとした「新しい我々の党」をそれの一歩一歩の歩みからきづきあげるもの、それが我々であるならば、我々はもう一度この間に答えなくてはならない。…共産主義者同盟は何であったか。同盟は安保闘争と分派闘争で何を主張したか、成果は、誤りは何か、我々は現在までに何をどの程度に深め発展させたのか、残されている仕事は何か。……>（「低迷の中から～共産主義者同盟は何を明らかにしたか／我々は何を受け継ぐべきか」田原芳男（誤植か？）関西共産主義者同盟『共産主義』13号、62年）

大学管理法案粉碎闘争、京都で爆発。全国学生運動再建への巨大な烽火となる。特に京大では全学封鎖戦術など、後の全共闘運動の先駆けとなるような闘争が展開された。関西社学同で通称「大管法世代」輩出。

当時、阪急電車が四条河原町まで延長する工事中であることを口実にデモコースの禁止・変更が命令されていたが、府学連委員長清田祐一郎は円山野音でイエーリングの『権利としての闘争』の一節を引用して名演説、全員の士気を鼓舞して見事に機動隊の規制線を完全突破、四条河原町を制圧。

労働者への教育機関として関西労働者学園が開設された。学長は哲学者の藤本進治、事務局長は阪上孝、同二代目は竹本信弘。この学園卒業生は65年よりの反戦青年委員会運動の中心を担った。

大管法デモ 祇園石段下



中島鎮夫
主要論文

「現代資本主義（その二）」（田原芳、『烽火2号』62年）

- (1) 経済領域と関税
- (2) 封鎖経済
- (3) 戦後資本主義
- (4) EECとヨーロッパ合衆国

1963・24歳

学生運動のスローガンに「安保以後からの訣別」がうたわれる。

学友会委員長田所伴樹（61年経）、書記長高木典夫（61年文）。

京都府学連委員長は高瀬泰司（年京大／喫茶「白樺」経営）。マル同舎四派で全学連再建へ動く。

中島鎮夫
主要論文

「国際共産主義運動と一国社会主义」

- (1) コミニテルン
- (2) 「ソ連論」
- (3) 何が社会主义か
- (4) 世界革命
- (5) 安保闘争の教訓

<……安保闘争において「反スターリン主義」は世界革命との関係で出されていた。然し、その後、「反スターリン主義」は「官僚制資本主義」へ「ソ連経済」へと傾斜していった。…スターリニズムの存在は唯單なるソ連一国内部における問題というよりも、むしろ世界との関係で問題とされるわけである。……>



ボラリス反対闘争

9月30日 ●市電・市バス・公共料金値上げ反対で、京都府学連、市会に突入。後に18名が起訴される。

10月 ●ポラリス寄港阻止三府県学連の統一行動（神戸）。京都府学連（社学同系）・兵庫県学連（統社同系）・大阪府学連（民学同・社学同）の共闘はこの時期、関西の恒例。

12月 ●同志社大学学費闘争の中、ハンスト・座り込闘争中の学友会執行部（田所伴樹委員長・61年経）、各学部自治会の学生等16名、武装した日共・民青約60余名（岩佐敏明・62年文。児玉正人・62年経、等が主謀者）の襲撃をうけ、一晩中にわたりリンチをうけ全員重軽傷。学内も「暴力事件をひきおこした学生運動」への批判昂まる。民青は「デッヂ上げ」を主張し、逆に翌年4月以降勢力を伸張。

再建から激闘への序曲

1964~67

1964 25歳

中島鎮夫、春、同志社大学卒業。学生時代から従事していた大学生協運動の強化・発展、関西・全国への拡大を目指し、東京大学生活協同組合へ就職し、東京へ。

東京の住居は、その後関西から東京オルグへ出かけたメンバーの常宿と化す。

63~65年にかけて次々と労働戦線へと同志社学生運動OBが参加。全電通（藤野興一、福富健・60年法、大塚彰・60年神）、私鉄（田中正治・60経）、国労（中村允孝・59年神）、繊維労連（堀一、年）等。

既に大阪総評に所属した森安弘之（56年神）とともに活動。他にも66~67年頃からの各地地区反戦事務局へも多数のOBが参加。

一方、清田祐一郎らを中心に旧共産党尼崎市委員会グループ（菊永望、杉本昭典、等）と接触して活動がはじまる（後に阪神共産主義者協議会の運動に発展）。

4・17ストの中止と戦後階級闘争の「第三の転換点」を主張。

同志社リンチ事件裁判で被害者側の学友会本部、証言拒否し、逆に罰金を受く。

学友会主流派の活動は低調となり、学内に「リンチ事件後遺症」のアバシー現象が拡がる。

6月 ●学友会に「二年生内閣」（蒲池裕治委員長、藤本敏夫副委員長・会計）誕生。各自治会も「オール二年生内閣」。文学部に民青執行部誕生（岩佐敏明委員長）。

8月2日 ●全国の新左翼第三潮流の労働者・学生（含革マル派・構造改革）。

8月3日 ●京都府学連主催（書記長塩見孝也・62年京大文）で「全学連再建準備全国学生集会」（京都）。

10月 ●原潜寄港阻止作世保闘争。

12月 ●秋からの共同行動（改憲阻止・原潜寄港阻止・日韓条約粉碎）をふまえ、全学連再建の機運昂まり、各府県学連代表者会議を経て、全国自治会代表者会議（実行委員長田中正治）が開かれた。革マルと日共を除く全左翼党派が集まる。三派から構改（民学同合）まで。あと一步で挫折。

●証言●

この時まかれたピラの組織名が「関西共産主義者同盟東京都委員会」とは秀逸（責任者は味岡修・60年中央大）。

<……関西ブント全国化をねらっての、関西ブント・東京都委員会という組織的措置は、かかる全国化への指導部を首都において確立するため、我々の集中的な試みである。……>（レジメ「関西ブント全国化～共産主義者同盟全国委員会結成をめざして」より）

僕達の兄の斗いの歴史は
血と涙で 滉れている
徴兵を拒否して 牢獄につながれ
天皇の御幸をインターで迎え
砂川の雨の中 屈辱の唄を唄った
ああ そして四年前には
百万の人民の先頭で
勇敢に斗い あの日の突入に
仲間の一人を
無名戦士として葬った

その苦しみの道を 僕も行こう 例え死しかないとしても

その苦しみの道を 僕も行こう

いつか 微笑みしか知らない様な そんな素晴らしい日を創る為に
僕が倒れる時に 又 弟が立ち上るだろう

（うえだいつお作 1964秋『異端宣言』1966年1月10日 同志社大学
此春寮文学研究会発行 作者は1960年同志社大学神学部入学）



1965 26歳

1月～5月 ●同志社大学此春寮（神学寮）閉寮攻撃をはね返し、一般寮開放をかちとる。以降の寮の学生完全自主管理（水光熱費の大学負担／入退寮権の学生掌握）への道開く。

3月 ●中島鎮夫、松村洋子（22才）と結婚。

一向健（塩見孝也）「第三期論」（政治闘争、社会政治闘争）を提唱（『戦士』6号、

4月。『戦士』はこの6号で終刊）。

日韓条約粉碎・ベトナム戦争反対闘争、昂まる。

同盟再建活動のため関西より労対・学対メンバー多数上京。都学連再建され、以後京都府学連とともに全学連再建の呼びかけを発す。

共産主義者同盟再建の第一歩として関西ブントを中心に統一委員会（機関紙『先駆』）が結成さる。結集したのはマルクスレーニン主義派（『赤光』）、独立派（主に明治大学グループ）、味岡グループ、SMグループ（仏徳二）等。

6月●中島鎮夫、同志社大学学友会選挙指導のため乞われて、東大生協を退職し関西へ戻る。寝屋川市に居住。

以後、同志社の学生運動と密接に結合。

8月●関西大生協へ就職。

同志社大学学生会館の完全学生自主管理闘争に勝利。この勝利で学友団傘下の各団体（学術団・文連・体育会・部外団体連・等）の自治意識昂まり、その後の活性化と政治参加への大きなきっかけとなった。

「10. 21国際反戦デー」統一行動はじまる。

塩見孝也、早稲田大闘争の渦中で社学同早稲田大支部を組織化。

1966 ● 27歳

2～3月●国鉄運賃値上げ反対闘争で大量逮捕相次ぐ。

6月●関西地方委員会機関誌『烽火復刊1号』発行（6.15）。

「プロレタリア独裁」（田原芳、『烽火復刊1号』発行）

- (1)何が危機か (2)民主主義運動の崩壊 (3)国家主義、ナショナリズムの抬头 (4)プロレタリア独裁、世界革命

7月30日●全学連再建にむけた関西社学同の全国展開のため田原芳論文集が発行さる。

この時期、同志社大学の学生細胞結集のため指導を強化。

『プロレタリア独裁への道』発行・同志社学生新聞局。

代表論文は「日本の『孤立感』と『生産力思想』」田原芳、他。

「日本の『孤立感』と『生産力思想』」<その一>

- (1)安保闘争、三池闘争と議会主義 (2)日韓会談と近代主義（二つの「単独強行採決」) (3)日本の孤立感 (4)「孤立感」からの脱皮 (5)「階級闘争とは何か」 (6)日本の労働者階級

「日本の『孤立感』と『生産力思想』」<その二>

- (1)幕末から明治23年（明治政論の一考察） (2)「ナショナリズム」と「近代主義」～竹内好の「国粹」と加藤周一の「欧化」 (3)「民主主義」と「近代主義」～山田宗睦の戦後民主主義と構造改革 (4)「近代主義」と「生産力思想」～大塚久雄と「民

主主義近代化論」 (5)資本主義不均等発展か、半封建か～天皇制をめぐる丸山真男と尾崎秀実 (6)日本共産党と「天皇制」～日本共産党21～34年までの概要 (7)日本共産党と「半封建」「近代化」 (8)「民族」と「革命」

「現代世界の構造」<その一>

「現代世界の構造」<その二>

(1)社会主義諸国の世界戦略 (2)帝国主義諸国の対外戦略

(3)58年以降の国際政治

他に関西共産同、関西社学同の政治論文を多数集録。

<……我々が日本における革命を考えた時、我々はこの日本民族の問題にどのような解答を与えるのかという事をぬきにする事はできないのである。……さてこの様に、日本の労働者階級と日本の革命を考える時、我々は再び国際的な問題……「三つの民族国家」をめぐる問題が出てくる。……共産主義者同盟は国際主義を、世界革命をこれに対置した。……>

京都府学連蒲池裕治委員長。以後、再建都学連（山本浩司委員長・早稲田政経）とともに全学連再建のため東京へ。

9月1日●共産主義者同盟統一再建第六回大会。マル戦派（『黎明』）と統一委員会（『先駆』）の合同、松本礼二議長、飛鳥浩次郎（佐藤浩一）政治局員他。

ラスク来京阻止闘争。デモコース変更・禁止をはねのけ深夜まで戦闘。ジグザグデモ戦術の限界に逢着。次への飛躍は？

千里山生協の再建・設立。

12月●全学連再建なる。通称「三派全学連」（斎藤克彦委員長・明治政経、蒲池裕治副委員長）

1967 ● 28歳

中島鎮夫、大阪府生協連合会へ出向。府連機関誌『都市生活』1～60号巻頭論文を執筆。

「プロレタリア独裁への道 現代革命の諸問題」（1967年2月、共産主義者同盟政治局 田原芳）

（序文）（第1章）歴史～マルクスの時代、レーニンの時代、「現代」の歴史的位置（第2章）商品化現象と二つの思想（実存主義、民主主義、資本主義と民主主義）（第3章）国民経済と国家（第4章）資本主義の発展段階と民主主義（第5章）現代革命の諸条件～平和革命か内乱か／「党」と「ソビエト」

／労働者階級とイデオロギー／「権力への道」ナショナリズムの抬頭、「大衆の分解」

● 言論 ●

三派全学連の全国拠点として同志社学生運動の高揚期を迎える。デモの度に参加者が常時2~300名（ヘルメットが常態化して以降は全員赤ヘル着用）。

一大学で学生が二~三千も集まると、もう「学連」も「インター」も知らない学生が大半。そこで「カレッジソング」が高らかに歌われるのも同志社ならでは。

関西地方委員会、産別組織の整備、教育・電機・鉄鋼・繊維・電通にブントの旗。

『烽火 特別号』で産別特集、「労働運動の転機と我々の路線」他掲載。竹野、八木沢、等執筆。

6月末●同志社大学生協総代会へ日本共産党に指揮された学生・教職員・生協職員等200名が乱入し、逃亡のあげく別会場で生協理事会をデッチあげ、以後今日まで占拠中。学内の日共の分裂活動の拠点と化す。

「佐藤ベトナム訪問阻止」10.8羽田闘争。

*社学同はこれを「国際主義と組織された暴力」として総括。以後、暴力の復権への熱望が昂まる。関西一円の大学・職場に「プロレタリア独裁万歳！」のビラがとび交う。

10.8闘争
『烽火』6号



10.8闘争 「季節」6号

<……日本人民は「剣闘士と野獣の闘いを観覧するローマ市民」から、はじめて血と命をかけた諸国の人民と同資格を得た。国際的闘いは今や一つに固く結びつけられる基礎を獲得した。……学生諸君、よくやった。諸君の英雄的、自己犠牲的闘いは、日本だけでなく、世界の労働者と左派を勇気づけている。……>

<それが階級闘争である以上、眞の闘いに対しては、かならず権力の反撃、弾圧はつきものである。10/8、11/12闘争に対する権力の動向は、当然この例外ではない。……>

<……11月12日の「佐藤訪米闘争」を学生は再び実力闘争で闘おうとしています。労働者はこの闘いを学生にまかせたり、闘う学生を批判したりするのではなく、労働者階級の闘いとして、労働者が中心になって闘わなければなりません。……>

<……一撃されてもこれに応えようとしない人間らしさを失った人間は死んだ人間に違いない。……いったん反撃はじめた時、人間は生きている。この人間を銃弾や棍棒は殺すことはできない。戦っている人は生きている。生きているからこそ、彼等には死ぬ用意があるのだ。……>

「佐藤訪米阻止」11.12羽田闘争。

<……10/8、11/12闘争は「国際主義」と「組織された暴力」が70年安保へ至る今後の階級闘争の主導的役割を担うことを示した。……>（社会主義学生同盟関西地方委員会の見解）

芦屋市に前田、中島他11名で保育所付共同住宅を設立し、居住。居住者のうち大半が組合運動等の関係者という状態であり、活動の関係上、「一夜の宿」を求める無宿者や学生風の来訪者が跡を絶たず。

関西各地に赤ヘル反戦統々と誕生し、ノンセクトも含め大衆的な共闘組織として関西地区反戦連絡会議が結成。初代議長は北大阪反戦青年委員会前田裕悟、事務局長は尼崎反戦青年委員会清田祐一郎。

藤本敏夫、全学連副委員長代行の任務のため上京。

2月明大闘争の敗北と、10/8~11/12闘争の貫徹をめぐって、同盟内でマル戦派との内部論争が激しくなる。

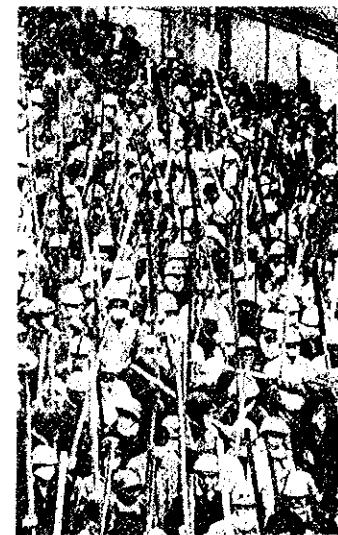
この時期の中島鎮夫の理論活動は主に全学連の実力闘争への擁護、マル戦派の「国内攻撃唯一論」的傾向への批判であった。

「プロレタリア独裁への道～我が同盟の緊急の任務について」共産主義者同盟関西地方委員会（『烽火2号』67年6月）

<……同盟及び社学同の二つの任務ということは、この「暴力革命」のための活動と、「大衆にむけて」の活動とを、同時に組織的に遂行することであり、かかる活動が可能なように、党の組織を整備し……徹底的に活動を続けるということにある。……>



全学連（藤本）
『戦旗』68.5.5 132号



11.12闘争　『戦旗』68.6.15

「佐藤訪ベトナム訪米実力阻止闘争に対する共産主義者同盟関西地方委員会の基本態度」共産主義者同盟関西地方委員会（『烽火5号』67年11月3日）

「社会主義の当面する焦眉の課題」共産主義者同盟関西地方委員会（『烽火5号』67年11月3日）

序文　(1)世界共産主義革命　(2)階級闘争の基本的性格
(3)プロレタリア独裁への道は暴力革命である　(4)日本における階級闘争と我々の任務

「10/8、11/12闘争と権力の動向と我々」共産主義者同盟関西地方委員会（『烽火6号』67年12月7日）

「全学連に対する破防法の適用を許すな」共産主義者同盟関西地方委員会（『烽火6号』67年12月7日）

「戦後資本主義の現段階」共産主義者同盟関西地方委員会（『烽火6号』67年12月7日）

(1)生産の集積と「独占体」の支配　(2)戦後資本主義の構造的

矛盾　(3)戦後資本主義における市場再分割のはじまり　(4)
世界資本主義と世界革命

<……植民地を中心とした多角的な局地戦争と、帝国主義列強を同時におそう信用恐慌を、もっとも現実的な帝国主義の破局への道として考えることができる。いまやすべての社会的矛盾は、戦後世界資本主義において、極度にからみあっているのであって、これは我々に、当然「世界革命」の必然性をあたえているといわねばならぬ。……>

その意気、天をも衝く

1968~69

1968・29歳

1月●原子力空母エンタープライズ佐世保寄港阻止闘争。
前段のアメリカ神戸領事館抗議闘争では、学生部隊を無傷で出発させるため、関西地区反戦連絡会議の労働者達は最先頭で坐り込み大弾圧を一手にひきうけて闘う。
この時期、反戦は佐世保・三里塚と転戦。各地区集会でも100名から600名規模で集会を開催するなど奮闘。
3月●共産同第七回大会、マルクス主義戦線派との内部闘争が頂点に達し分裂。
この時期の『烽火』の主要執筆者は、他に佐伯武・野崎進・榎原均・竹野巖・旭凡太郎・一向健、等。

<……（第六回大会の）政治スローガンは……現実の他のもう一つの側面、即ち世界の階級闘争が日本のプロレタリアートに果す任務、役割については何も言っていないということについての、はっきりとした政治的留保を含んでいる……>

マル戦派との内部論争勝利のため中央強化策として、学対経験者を中心に多数上京（京大、市大中心）、東京各地区へ常任を配置し、主に地区反戦づくりに従事。
6~8月●ASPAC（アジア太平洋閣僚会談）粉碎へ全力。
6月21日●「神田・御茶水をカルチャーランプに」。
6月28日●赤ヘル全学連・反戦、再度、御堂筋を突破・占拠

●証言● 前田・中島、等が居住するマンションは自主的な保育園運営などユニークな試みが新聞等で注目されていた。が、他方では「レッドマンション」としての風評も盛。そんなこととは露知らず入居した人もいて、そんな人はその後

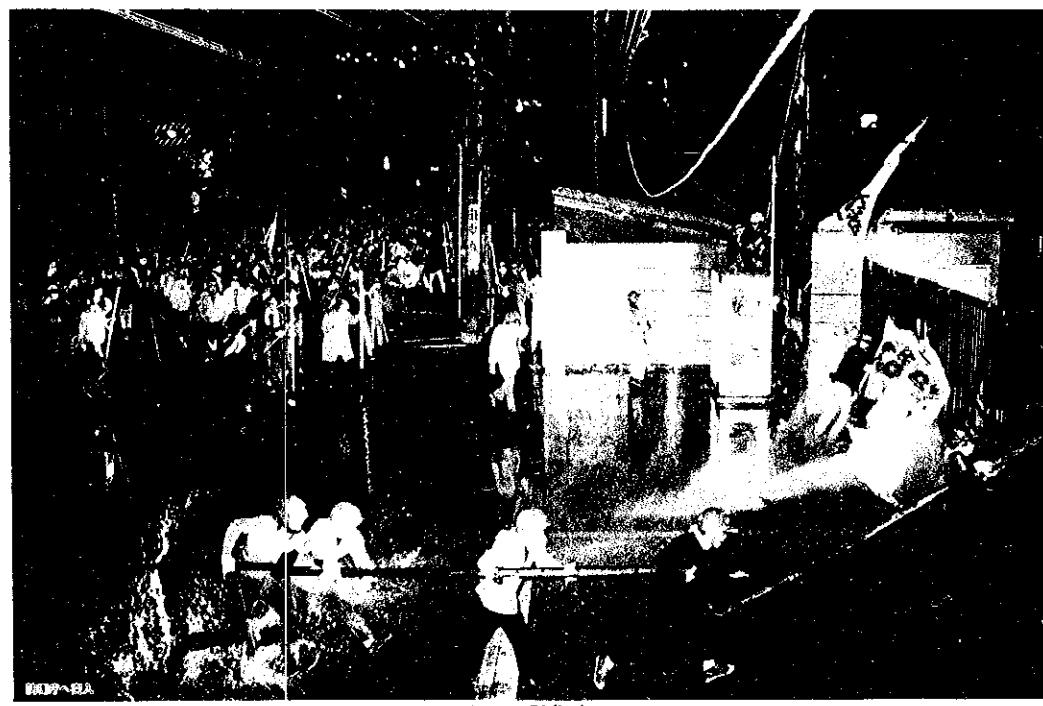
に転居した先へ公安が尋ねてきたりしてびっくり。

ある居住者はベ平連とつきあいがあり、その頃反戦脱走米兵を扱ったジャテック関係者から相談をうけたこともあり、共に「お上に楯つく者同士」と知らずとんだ藪蛇になりかけたという。

青年インターのブントへの合流（最大拠点が大阪経済大）にともなって関西学院に社学同支部、つづいて神戸大学にも元フロント系中心に支部誕生。

4月●日共＝民青「京都府学連」、立命館大を出陣して同志社大構内で集会をはかるとしたが、一歩もふみこめず失敗。「民主化の総仕上げ」ならず。

この時期、「烽火」が定期的に発刊され（B5判100頁）毎号田原芳は関西地方委員会名義で基調的論文を執筆し、関西のみならず東京はじめ全国で愛読された。論旨は主に世界資本主義分析をめぐって岩田弘理論との対質、および世界同時革命論の定式化、マル戦派理論・路線への批判等であった。



10.21 防衛庁

中島鎮夫
主要論文

「日本労働者階級に対する共産主義者の任務」共産主義者同盟関西地方委員会（『烽火』7号、68年1月31日）

「同盟第七回大会と我々の課題」共産主義者同盟関西地方委員会（『烽火』8号、68年2月29日）

- (1)われわれがあまえるべき点 (2)第7回大会の課題 (3)プロレタリア国際主義の復権 (4)「行動綱領」

「再び『同盟第7回大会と我々の課題』」共産主義者同盟関西地方委員会（『烽火』9号、68年5月21日）

- (1)帝国主義列強を打倒せよ (2)同盟第6回大会と「永続革命」
(3)日本帝国主義と70年安保

「社会主義と我々の態度」共産主義者同盟関西地方委員会（『烽火』10号、68年6月15日）

- (1)「永続革命」か「世界革命」か (2)「帝国主義列強の打倒について
(3)裏切史觀で革命はできない (4)最近の帝国主義の美化について

「同志社人への我々の主張」（同志社大学一部・二部学友会、他発行パン「総論」無署名、68年5月）

7月●全学連中執で藤本敏夫委員長就任（2月から副委員長代行に）。

大阪総評青年部長に福富健、金電通近畿地本青年部長に電通反戦メンバーのSが就任。

7月●大阪府学連結成さる。委員長西浦隆男（大阪市大）、書記長藤岡弘（大阪経大）。

9月●関西ブント以来、関西地方委員会で独自に発行してきた理論誌『烽火』は11号をもって廃刊、今後は中央強化のため、その活動を中央機関誌『共産主義』に統合することを決定。

10.21●防衛庁・新宿（東京）、御堂筋（大阪）闘争、東西で爆発。

「丸一太、丸太かかえて殴り込み」の時代。

12月●同盟内での「10/21闘争の勝利と11/7闘争の敗北」をめぐっての戦術論争をきっかけに分岐が明確になりはじめる中、同盟第八回大会が開催される。議長は仏徳二。中島鎮夫は、この大会で新設された綱領委員会の委員長に就任し、以後同盟の理論的基礎の確立の作業に励む。

○証言○ 全共闘運動が燎原の火のように全国各地へ、そして「民主主義の本家」たる立命館大へも波及してきた。同志社OBの高野、佐野文男（60年経）等は助手・院生となっていたが、十年近くおさえてきた情熱がよみがえり、よせばいいのに年甲斐もなく（失礼！）「義理」に殉じて参加。佐野は「大学院生」の肩書きが気にいられたか、全共闘議長に。ちなみに副議長には「柔道部所属」の経験がものをいって他に大した実績（？）がないML派のKが就任、多士彩々の顔触れであった。

1969 ● 30歳

1・18～19●東大安田講堂闘争

西大阪反戦など参加・逮捕さる。この後、京大闘争へ反戦労働者がクラス討論入りしたりして旋風をおこすきっかけとなった。



東大闘争（社学同ヘルの火薬瓶投げ）

2月末・京都・大阪・神戸と各地で「東大・日大闘争勝利労学決起集会」開催される。
関西地区反戦の挨拶「今度は学生諸君を工場のバリケードの中へ案内するであろう」「いくつかの官公労拠点で労働者の安田講堂攻防の実現を」が大いにうける。

社学同関西地方委員会、総力で関西各大学の入試阻止を宣言

2～3月・全関西入試阻止闘争。

3月末・第20回全学連大会開催、於同志社大学。

4・28・沖縄闘争へむけ同志社大一週間の政治スト。

4・28・沖縄闘争で共産同、革共同に破防法適用。

この闘争準備過程および総括をめぐり同盟内で対立高まり顕在化しはじめる。

6月・同志社大「安保粉碎の無期限スト」突入（12月解除）

もともと「安保を承認する学長の選出阻止」というのがスト権提案理由であり、無期限ストは必至であり、後に赤軍派登場で主力が不在となった秋以降はストのそもそも理由が奈辺にあるのか不明であった。他大学のいわゆる全共闘運動のように学内改良課題が出発点となった大学と違って、純然たる安保無期限ストであった。

「7・6赤軍派分派闘争（仮議長リンチ事件）」

東京の戦旗社に戯れ唄が一句、「ここは涼しい丘の上、武装蜂起の声がする」

（詠み人知らず）。（「丘」とは明治大学の傍の喫茶店）

望月上史（65年文）中央大学で転落・重傷、看病もむなしく死去。

関西地方委員会出身常任活動家中心の分派活動のため、関西の去就が全同盟的に指摘されたが、関西では分派も交じえて討論が展開される。同志社大学関係は64年入学生までは関西地方委へとどまり、65年以降入学生は赤軍派へ結集した。



4・28沖縄闘争 東京医科歯科大に結集した突撃隊

中島鎮夫
主要論文

「共産主義者同盟の総括と綱領問題」共産主義者同盟綱領委員会（田原芳 B 5 判140頁）

I 共産主義者同盟の組織総括とその問題点

- (1) 旧共産主義者同盟の提起した問題 (①～⑥) (2) 党内闘争から党派闘争へ (①～⑧) (3) いわゆる関西ブント（共産主義者同盟関西地方委員会）の総括

II 同盟統一委員会から同盟第八回大会まで

- (1) 共産主義者同盟統一委員会の結成 (①～④) (2) 共産主義者同盟再建第六回大会～現代における永続革命とわれわれの任務 (①～②) (3) 同盟第七回大会 (①～②)

III 共産主義者同盟と綱領問題

- (1) 現代世界の同一性と差別性
 - ①各党派の戦略的立場 ②現在の「世界同時革命」戦略の意義と限界 ③国家権力とプロレタリアの関係
- (2) プロレタリアートの世界独裁のための闘争
 - ①プロレタリアートの世界独裁とは何か ②プロレタリアートの世界独裁のための闘争 ③プロレタリアートの世界国家あとがき

<……この第三次綱領草案から同盟第八回大会を一貫して追求されてきた最も根本的な問題は、世界革命であり、又、世界革命における各国革

命の関係である。この世界革命と各国革命の関係を一方で革命の戦略・戦術として確定すること、そして他方で、この革命を媒介として社会主義、共産主義の全過程を明らかにしようとした点である。……>

中島鎮夫
主要論文

「プロレタリアの世界独裁のための闘争～綱領的見地から見た『民族問題』について」共産主義者同盟 田原芳 (B 5 判31頁 69.10.21)
(1) マルクス主義と「民族問題」 (2) プロレタリアートの世界独裁 (3)「世界同時革命戦略」

<……國家の「廃絶」と「死滅」の過程を一国的にではなく、世界的にとりあげる必要性……民族国家の悪矛盾を世界国家（プロレタリアートの世界的な民主主義的中央集権）によって断ちきること……>

<……問題の本質的な点は、われわれの世界同時革命戦略が、プロレタリアートの世界独裁の建設にとって不可避的なものであること、それ故に世界社会主義から共産主義の建設の基本路線を実現するために不可欠の戦略として考えられているのだということである。……>

中島鎮夫
主要論文

「『資本主義から共産主義への過渡期』をめぐる諸問題～プロ独の本質は何か」(田原芳 B 5 判31頁、69年暮)
(1) われわれの基本的考え方 (2) 労働の組織化について (3)「生産の組織化」について (4) 連邦制と「民族問題」について

<……過渡期世界の革命が、世界革命戦争の完遂を要求することは、ロシア革命とともに現実の実践的問題としてあったのであり、けっしてわが共産主義者同盟が、その頭の中で描いた夢物語ではない。そこへむけて世界の階級闘争と党派闘争は組織されねばならない。……>

8月●共産主義者同盟第九回大会。赤軍派別党へ。

10~11月●安保決戦。

10・21●大阪中電マッセンスト挫折。前田裕暗マッセンスト方針に反対して同盟を離れる。

中島鎮夫
主要論文

「当面する『軍事』の政治的質」(『党の革命、革命の軍隊』第六章所収、共産主義者同盟発行、69年12月頃執筆、B 5 判)
(1) 過渡期世界の階級闘争 (2)「自國政府打倒」の今日的課題
(3)「自國政府打倒」と「全人民の武装」

<……このはじまりだした階級闘争の新しい段階が、あれこれの政策をめぐる争いではなく、どのような政府をわれわれがつくるべきかという

問題が「侵略武装」「自衛武装」「非武装」「全人民武装」というかたちで、まさしく「武装」をめぐって人民の間の分解がはじまっているという点にはほかならない。……>



10~11月安保決戦 「党の革命・革命の軍隊」より

分裂…失意の日々 1970~79

1970 ● 31歳

2月●同志社大で共産同 v.s. 赤軍派の党派闘争激化。

中島鎮夫
主要論文

『プロレタリア独裁への道 3号』共産主義者同盟 (田原芳、同志社大学学生新聞局発行、1970年1月)
「現代革命の条件と社会主義～無政府主義・組合主義・アナルコサンディカリズムそして官僚主義の克服」共産主義者同盟綱領委員会 (田原芳 1970.3.10発行 101頁)

序文 第一章 綱領委員会からの提起
第二章 現代革命と社会主义
(1) 階級闘争の質の転換にもとづく党の革命 (2) 過渡期世界の階級闘争
第三章 現代ソビエト運動 第四章 「自國政府打倒」と「臨時革命政府樹立」の闘い 第五章 正規の包囲軍を組織せよ、赤軍派の悲劇とその教訓 第六章 「左翼反対派」批判、「前衛派」の「共産党原則綱領案」批判 第七章 「資本主義から共産主義への過渡期社会」をめぐる理論問題

<……プロ独の主要な本質は前衛党に代表される「プロレタリアートの組織と規律にある」。そしてこの組織と規律は、一般的でなく、資本主義社会における「貧労働制」にとってかわる、新しい「一層高度な労働の組織」をその経済的基礎としなければならない。……>

中島鎮夫、初夏から秋にかけて上京。

70年代の同盟建設をめぐり内部論争激化。情況派、叛旗派と分裂。

田原論文（「世界プロ独論」）「批判」と「克服」が各分派共通の理論課題となる。主な批判者は日向翔（早大）を中心とするグループ（後に戦旗派）。

12月18日 ● 「中央戦旗社」グループ（関西派・神奈川左派・鉄の戦線派等）が、日向派（『戦旗』編集局）と別個に政治集会開催、日向他を除名。日向派もまた「12・18集会」グループを除名。二つの『戦旗』発行。

第二次ブント最終的に分裂。

1971 ● 32歳

4月28日 ● 東京での八派共闘統一集会会場で「戦旗派」「12.18ブント（連合派）」内ゲバ。この党派闘争以降、「連合戦旗派」内部で論争・分岐はじまる。

中島鎮夫
主要論文
「サイバネットクスかプロレタリアの独裁か～唯物史観をめぐる闘争」
(B5判 56頁、71.5.6) ……最後の政治論文か？

はじめに (1)いわゆる「能力主義」批判 (2)サイバネットクス批判 (3)プロレタリアートの独裁 あとがき

燃ゆる夜は 二度と来ぬゆえ 幻の
 戦旗ひそかに たたみゆくべし
 明日あると 信じて来たる 屋上に
 旗となるまで 立ちつくすべし
 革命歌 酔いて唄えば きれぎれに
 風がつぶやく 嘆きのごとし
(道浦母都子・歌集『無援の抒情』1980年発表より
 岩波同時代ライブラリーで再刊)

1972 ● 33歳

2月1日 ● 同志社大学学費闘争で機動隊と衝突、100名連行、30数名逮捕さる。

中島鎮夫、政治活動を離れると同時に生協を退職。

1972 ~ 40

失業、就職と転職をくりかえす。

1974 ● 35歳

神戸市灘区に喫茶店『カミーノ』を経営。

1975 ● 36歳

心身ともに体調を崩し『カミーノ』閉店。

2月～8月 ● 神經症にて光愛病院へ入院。

10月 ● 千里山生協へ就職。

この間、胃潰瘍で二度入院。

1985 ● 46歳

11月 ● 胃の手術。

癌細胞が発見され、再度胃の全摘、リンパ管など、二度の手術。

この間も酒を飲みつづけ「やりたい事はやったしナア」と一人ごちる毎日。

1988 ● 49歳

肝臓も悪化。

二人の子供達にとっては「いつもお薬とお酒を飲んでいた父だった」という。

9月 ● 千里山生協を退職。闘病生活に入る。

抗癌剤を飲み、睡眠薬を常用。肝臓も悪化。

1989 ● 50歳

6月14日 ● 急性心不全にて永眠。

遺された家族は妻洋子さん（47才）、子供二人晃夫君（24才）、美穂さん（17才）。

6月16日 ● 折からの嵐のような豪雨突風の中で古くからの仲間・先輩・後輩・友人・知人の参列に送られ告別式。

中島鎮夫＝田原芳が蒔き育んだ同志社大学学生運動は、90年代初頭にあっても、全国のノンセクト学生運動の拠点として、赤ヘル潮流の旗頭として、反安保・反天皇制闘争の隊列の中で健在。

1990

6月10日●「中島鎮夫君（田原芳）を偲ぶ会」開催。

時には昔の話をしようか
通いなれた なじみのあの店
マロニエの並木が窓辺に見えてた
コーヒーを一杯で一日
見えない明日を むやみにさがして
誰もが希望をたくした

ゆれていた時代の熱い風に吹かれて
体中で瞬間を感じた そうだね

道端に眠ったこともあったね
どこにも行けない みんなで
お金はなくとも なんとか生きてた
貧しさが明日を運んだ
小さな下宿屋にいく人もおしかけ
朝まで騒いで眠った

嵐のように毎日が燃えていた
息がきれるまで走った そうだね

一枚残った写真をごらんよ
ひげずらの男は君だね
どこにいるのか今ではわからない
友達もいく人かいるけど
あの日のすべてが空しいものだと
それは誰にも言えない

今でも同じように見はてぬ夢を描いて
走りつづけているよね どこかで

(加藤登紀子『時には昔の話を』歌詞)

<参考文献>

- 『同志社の葉』同志社大学学友会、年鑑（58年～63年版）
- 『異端宣言』うえだいつお、同志社大学此春寮文学研究会（1966年）
- 『プロテスト群像～此春寮30年史』同志社大学此春寮（1975年）
- 『ほのぼの回想記～今出川から広小路へ』高野澄（『敗北における勝利』所収）
- 『日本における「新左翼」の労働運動（上）』戸塚秀夫他共著、東大出版会発行（1973年）
- 『新左翼運動全史』蔵田計成著、流動出版（1978年）
- 『季節』5号「安保ブントの崩壊と関西ブントの思想」（エスエル出版会、1981年）

同志社大学学生部学生課、他多数より取材。

中島洋子 前田裕晤 佐藤浩一 仲尾宏 土方克彦

連絡先 / 芦屋市東山町30-3-203 中島洋子 ☎0797-31-4819



60年2月10日の日付のある共産主義者同盟関西大会のカット。
佐藤浩一はじめ、学生の同志がスケッチされている。
作者は当時、神戸細胞所属の労働者同盟員藤本敏夫さん。

夢は世界を翔けめぐる

